

映画資料のデジタル・アーカイブ構築：
失われた映画作品のカタロギングを中心に

権藤 千恵(<mailto:psg01996@sps.ritsumei.ac.jp>)

立命館大学アート・リサーチセンター

映画研究において、映画作品が記録されているフィルムは研究の第1次資料である。しかしながら、すでに、無声映画の90%は失われているといわれており、戦前の日本映画研究においては、書誌やスチル等の、ノン・フィルム・マテリアルが研究の第1次資料となる。本稿では、ノン・フィルム・マテリアルから抽出した作品のテキストデータを、作品目録としてカタロギングするための手法を中心に、映画研究におけるデジタル・アーカイブの有用性や今後の課題について考察する。対象となるのは、牧野省三を中心とする映画集団「マキノ」が製作した約1000作品である。

キーワード：マキノ映画、映画作品目録、カタロギング、メタデータ、ダブリンコア

Digital archive construction of movie data: Cataloging of the lost movie

GONDO Chie

Art Research Center, Ritsumeikan University

In movie research, the films with which the movie is recorded are the first data of research. However, already, it is said that 90% of the silent movie is lost, and non-film materials, such as a bibliography and a still, serve as the first data of research in Japanese movie research of prewar days. This paper considers the usefulness of a digital archive and the future subject in movie research focusing on the technique for cataloging the text data of the work extracted from the non-film material as a catalogue. Objects are about 1000 works which the movie group "Makino".

Keywords: Makino movie, movie catalogue, metadata, Dublin Core

1. はじめに

近年の情報技術の発達によって、さまざまな国の、さまざまな分野で研究資料がデジタル化されるようになり、インターネットによってデジタル化された資料を容易に閲覧することができるようになった。

映画研究の分野でも、同様に、書籍、シナリオ、雑誌の他、聞き書き、フィルムなどさまざまな資料のデジタル・アーカイヴが求められている。映画研究において、映画作品が記録されているフィルムは研究の第1次資料である。しかしながら、すでに、無声映画の90%は失われているといわれており、戦前の日本映画研究においては、書誌やスチル等の、ノン・フィルム・マテリアルが研究の第1次資料となる。

本稿では、ノン・フィルム・マテリアルから抽出した作品のテキストデータを、作品目録としてカタログングするための手法を中心に、映画研究におけるデジタル・アーカイヴの有用性や今後の課題について考察する。対象となるのは、牧野省三を中心とする映画集団「マキノ」が制作した約1000作品である。尚、本稿は立命館大学アート・リサーチセンターの研究プロジェクト「京都映像文化デジタル・アーカイヴ——マキノ・プロジェクト——」での活動成果をもとに報告するものである。

2. マキノ・プロジェクトについて

「京都映像文化デジタル・アーカイヴ——マキノ・プロジェクト——」(以下「マキノ・プロジェクト」)は、京都における映画文化の包括的なデジタル・アーカイヴを目

的として開始したプロジェクトである。映画集団「マキノ」とは日本映画の父と称される牧野省三が1919年に設立した「ミカド商会」に端を発し、その後「牧野教育映画製作所」や「マキノ映画」「マキノプロダクション」といった名称で、牧野ファミリーを核として展開された独立プロ活動を意味する。その活動期間は1919年(大正8年)から1937年(昭和12年)の約18年間である。

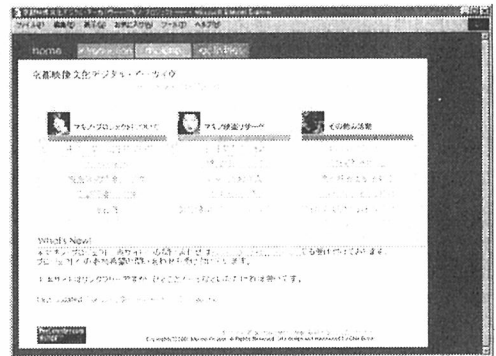


図1: マキノ・プロジェクトホームページ
(<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/cinema/>)

集団としての「マキノ」の全軌跡をとらえるために、各撮影所の活動記録・作品目録・スタッフ名鑑・撮影所図・上映館リスト・関係者談話等・同時代資料の画像情報などを調査・デジタル化し、インターネット・リソースとして、ウェブ上で発信していく試みを開始した。

現在は、1. マキノ・プロジェクトの活動、2. マキノ映画リサーチ、3. その他の活動の3パートで構成され、マキノ・プロジェクトの目的や映画集団「マキノ」の解説の他、太秦を中心とする京都洛西地域の撮

影所の説明と関連年表を掲載した「洛西撮影所 INDEX」、立命館大学アート・リサーチセンターで所蔵している映画フィルムの保存とカタログングなどの情報も公開している。

3. マキノ作品データベースの構築

3-1 目的

映画集団「マキノ」はその活動期間である1919年から1937年までのあいだに1000作品を越える映画作品を製作している。加えて、現存する作品は未発見のフィルムを含めても、1割に満たない。無声映画の90%がすでに失われているという世界のフィルム・アーカイヴの状況下において、マキノ作品も決して例外ではない。たとえフィルムが失われていても作品データという情報資源は、映画史を知る上で、また失われた作品を知るために必要不可欠な重要資料であり、フィルムに替わる第1次資料である。そのため、世界各国のフィルム・アーカイヴで行われている所蔵映画作品のカタログングと同様に行い、より詳細なかたちでデータ収集を行っていく必要がある。「マキノ・プロジェクト」ではまず、野村祐介氏製作による「日本映画データベース」(<http://www.jmdb.ne.jp/>)のデータの他、雑誌『キネマ旬報』の作品紹介や、当時マキノが発行していたファン雑誌『マキノ』の作品紹介等からもデータを収集し、できる限り項目を細かく分けてデータ入力を行うこととした。

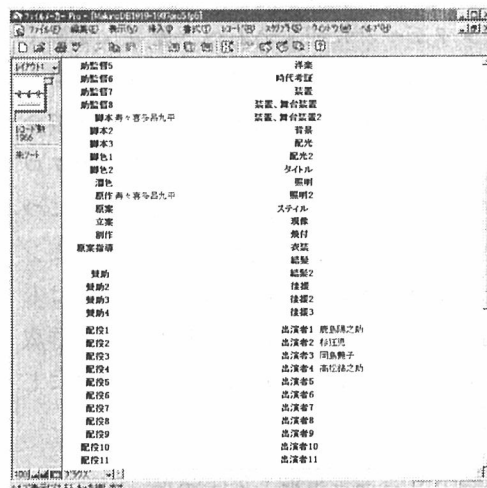


図2: ファイルメーカーを使ったマキノ作品データベースのデータ入力例

3-2 データ入力

これらテキストデータの入力にあたっての入力項目は、作品名(タイトル)、製作(会社)などのほか、スタッフ、封切年月日、配役、上映時のフィルム巻数など、様々な要素が必要となっており、1作品に対するデータ数は膨大な数となった。

これらのデータはメタデータを設定して、段階を追う毎に詳細データを表示するシステムを構築する目的をもって作成されたデータである。そのため、第1次データ表示のためのメタデータの作成と、段階表示のために適切なシステムが必要である。メタデータの作成にあたっては、ダブリンコアのメタデータセットを組み込み、記述にはXMLを用いることとした。

メタデータの項目づけと構造は、基本的には図書館で行われる書誌データの入力に近いが、映画作品の場合はフィルムの情報もメタデータに組み込むべき重要な要素であるため、ダブリンコアの基本15項目からの要素に加え、映像アーキヴィスト協会などで取り組まれている映像資料のカタログのデータ項目、また、日本映画については、東京国立近代美術館フィルムセンターで作成されている所蔵作品目録をはじめ、すでに数種類の作品目録がすでに作成されているため、これらの凡例も参考にした。

ダブリンコアに準拠したものはContributor(寄与者)、Date(日付)、Type(資源タイプ)、Format(フォーマット形式)、Language(言語)である。それ以外はマキノ作品データベースを照合させていくこととした。特にダブリンコアとの照合が難しいものを以下に示しておく。

*** Title(タイトル)→作品題名、作品よみ**

戦前の映画には検閲によって作品題名が変更になったものや、すでにフィルムが存在せず、家庭用映画でのみ現存するもので、公開時と題名が異なるものなどが存在して

要素名	elements	ラベル	第一段階	第二段階	備考
タイトル	Title	Title	作品題名		異なる作品名が併せて記述される。
寄与者	Author or Creator	creator	監督	広報監督、助監督、総監督、指揮、指揮者など	
			原作	原案、立案、創作、原案指導など	
			脚本	脚色、原色	
			撮影	撮影助手、装飾、撮影技術など	
			編集		
			録音	作詞、作曲、音楽効果	
			照明	配光、照明	
			音楽	音楽監修、音楽、サウンド、効果	
			配役、出演者	時代考証、装束、セット、マキ	
			その他		
主題及びキーワード	Subject and Keyword	subject	作品名、監督名、製作、ジャンルなど		検索時に使用するキーワード
内容記述	Description	Description	作品解説等		

要素名	elements	ラベル	第一段階	第二段階	備考
出版者	Publisher	Publisher	出版者、発行所、ARC		
寄与者	Other Contributor	Contributor	マキノプロジェクト、またメンバー名		ダブリンコア準拠
日付					ダブリンコア準拠
資源タイプ	Resource Type	Type			ダブリンコア準拠
形式(フォーマット)	Format	Format			ダブリンコア準拠
資源識別子	Resource Identifier	Identifies	作品ID、データID		ダブリンコア準拠
言語	Language	Language	日本語		ダブリンコア準拠
関係	Relator	Relation	マキノ活動年表		ダブリンコア準拠
対象範囲(空間的・時間的)	Coverage	Coverage	封切年月日、封切期		
権利管理	Rights and Management	Rights	利用規約へのリンク		ダブリンコア準拠

図3：ダブリンコア定義に基づいた作品DB凡例

いる。マキノ作品データベースでは作品題名が異なるものは別レコードにデータを作成しているが、明らかに同一作品であるものについては同じ作品IDを振ることにしている。

*** Creator(著者・作者)→製作会社、監督、原作、脚本、撮影、編集、録音、照明など**

映画は集団によってつくられるため Creator を特定することは難しい。基本的には製作会社、監督をメタデータとして、出演者、スタッフ等は詳細表示として公開していきたいと考えているが、さらなる検討が必要である。

* Subject(主題・およびキーワード)→作品名、監督名、製作会社、キーワードなど

キーワードには主に検索の際にもちいる項目を組み込む。

3-3 フィルム情報

ダブリンコアは幅広い電子情報のメタデータ要素を提供しているため、通常フィルム・アーカイヴに不可欠なフィルム情報には対応していない。マキノ・プロジェクトであげているフィルム保存のための採録項目のうち、フィルムの存在しない作品データベースに対応している項目は以下の通りである。

* フィルム・ベースの種類(ナイトレート/セーフティ)

* 無声/トーキー(トーキー形式のタイプ)

* 画面サイズ(スタンダード、ワイド、ピスタ)

* フィルムのサイズ(幅、ゲージ)

* 映画タイトル

* 映画製作会社

* 資料番号

フィルム・ベース、カラー、トーキー形式、画面サイズについては、フィルムが失われ

ていても、情報を特定することができるため、データベースに組み込む必要があるだろう。

フィルム・ベースは、1950年以前につくられた 35mm 映画にはすべて「ナイトレート・フィルム」とよばれるニトロ・セルロース製の 35mm ロールフィルムが使われている。また、日本では戦後まで総天然色映画やワイド画面の映画は製作されていない。尚、トーキーに関しては当時の雑誌記事などからほぼ特定することが可能である。

3-4 公開方法

データ記述は XML で行うが、公開用のデータベースにはファイルメカを用いる予定である。立命館大学アート・リサーチセンターでは既にファイルメカによるデータベース公開が一般的となっていることもあるが、公開における即時性や、低予算でのサーバ管理が可能なおと同時に操作が比較的容易であることが理由にあげられる。マキノ・プロジェクトには理工系の研究者がいないため、人文系研究者でも管理可能なデータベースを運用する必要がある。

4. その他のテキストデータベース

4-1 活動年表と人物録

「マキノ・プロジェクト」では、この他のテキストデータベースとして、活動年表と人名録データ作成を行っており、年表の一部はホームページ上で公開している。今後は作品データベースへの関連づけを行い、

映画集団『マキノ』に関するリレーショナルなテキストデータベースの構築を目指すことにしている。



図4: マキノ活動年表

これにより、これまで映画研究ではなかなか試みることができなかった映画史への包括的なアプローチを可能にしていきたい。

5. マキノ資料のデジタル化

「マキノ・プロジェクト」では、テキストデータベース構築の他、寄託資料のデジタル化も行っている。これは、かつてマキノで宣伝部長を担当されていた都村健氏の資料が、マキノ・プロジェクトの活動に賛同されたご遺族のご厚意により寄託されたものである。

資料の内訳は、戦前の「キネマ旬報」誌468冊、「合同通信」2615冊、マキノ関係その他を含めた出版物106冊、スクラップブック等9冊、写真資料2966点となっており、現在、写真資料のデジタル化と、写真情報のデータ入力をすすめている。

参考に、スチル写真のデジタル化について説明しておく。

例) 都村コレクションの通し番号

T01-01-001

(資料の固有名) (袋) (連番)

上記の例にしたがって写真1点1点に番号をつけていく。この作業番号は後のスキニング作業の際にも共通の通し番号にして、デジタルデータと写真スチルの現物との照合を可能にする。

写真資料情報の入力の際は、画像ファイルの検索機能をもたせるために、先に付与した資料番号に加え、写真題名、被写体人物名、製作年、資料への書きこみの有無、資料状態の注記(補修が必要かなど)、入手先、入手年月、などの項目を入力する。

6. 考察

「マキノ・プロジェクト」では、以上のように映画文化の保存と継承を目的として、さまざまなデジタル・アーカイヴ活動を行っている。まず、失われたフィルムについて研究をすすめていく上で問題となるのは、さまざまな機関で保存されている映画資料について、または映画作品の情報についてどのように入手するかである。しかしながら、映画資料へ容易な情報アクセスという問題は、映画研究者の間だけではなく、映画資料を保存・公開するフィルム・アーカイヴが持つ問題である。従って、研究者やアーキビストに関係なく、映画資料アクセスという問題の解決モデルとして提示さ

れるのが、共通の目録データベースの構築であるといえるだろう。「マキノ・プロジェクト」におけるマキノ作品データベースの構築が、少しでも、映画研究におけるデジタル・アーカイブの必要性を理解していただけるものとなれば幸いである。

今回、作品データベース構築においてダブリンコアを用いたのは、ダブリンコアが書誌データとしてだけでなく、あらゆる電子情報のためのメタデータとして提唱されているものであること、同様にさまざまな電子データに対して柔軟に対応できるメタデータであることが理由としてあげられる。尚、メタデータの設定は、作品だけではなく、他のテキストデータやスチル写真情報のデータにも必要であり、同時にすべてのデータのリレーショナルが今後の課題となってくる。同時に、www コンテンツ化する際も、エンドユーザ側に立った工夫が求められており、今後も様々な課題に取り組む必要がある。

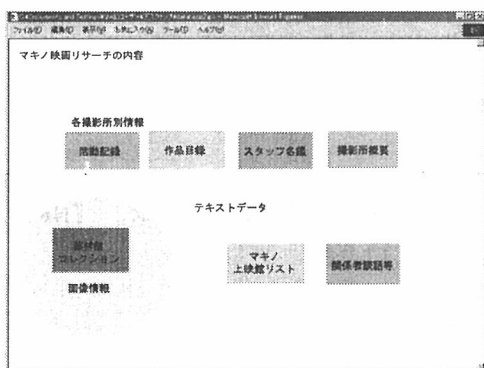


図5: マキノ・プロジェクトのデジタル・アーカイブ概念

テキストデータ作成においては、対象としている時代が大正末期から昭和初期であるため、旧字体が多く用いられている。今後、

資料のデジタル化にあたっては、漢字コードの問題にも注意を払う必要がある。この点については映画研究にかかわらずさまざまな分野の研究者との情報共有などをはかりながら検討していきたい。

次に、映画文化を対象としたアーカイブ活動では、フィルムだけでなく、ノン・フィルム資料の保存と活用が重要な問題となってくる。今後も、保存と活用という相反する命題に対し、デジタル・アーカイブという解決モデルを用いて、資料のデジタル化を模索していく予定である。

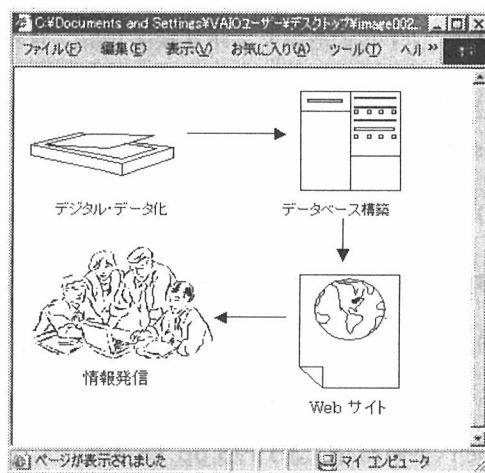


図6: 活動のフローチャート

謝辞

本研究は、立命館大学アート・リサーチセンターにおける文部省学術フロンティア推進事業の共同研究の一部として行っているものである。尚、本稿執筆にあたって助言とご指導をいただいた稲葉光行助教授と赤間亮教授に記して感謝いたします。

参考文献

- 1) Anthony Slide, "Nitrate Won't Wait" A history of film preservation in the United States", McFarland&Co., 2000
- 2) 京都映像デジタル・アーカイヴ——マキノ・プロジェクト——,
<http://www.arc.ritsumeit.ac.jp/cinema/>
- 3) Dublin Core Metadata Initiative, <http://www.dublincore.org/>
- 4) 映像アーキヴィスト協会, <http://www.amianet.org>
- 5) フィルムセンター所蔵映画目録 日本劇映画, 東京国立近代美術館 (2000)
- 6) Penelope Houston, "Keepers of the frame :the film archives ", British Film Institute, 1994
- 7) 立命館大学アート・リサーチセンター公開アーカイヴズ,
<http://www.arc.ritsumeit.ac.jp/dbroot/top.htm>
- 8) 日本映画データベース (JMDB) <http://jmdb.club.ne.jp/>
- 9) 佐崎順昭「映画資料・情報の集積と利用に向けて」 『NFC ニュースレター』 東京国立近代美術館 No.3 1995 pp.15-16
- 10) 「ネットワーク環境におけるアメリカのフィルム・アーカイヴへのアクセス」 『NFC ニュースレター』 東京国立近代美術館 No.22 1998 pp.11-13
- 11) 辻恭平著 「事典 映画の図書」 凱風社 (1989)